

今日もまた転がる

床上手な天女

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こいしちゃんを主人公にした。

目次

今日もまた転がる

「おねえちゃん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

ずっと書類と睨めっこしてる。私が目に入らないほど熱中してるんだなあ。

「おねえちゃん」

今度は肩に手を置くけど、にべもなく払われた。よつぽど大きな仕事なんだろうなあ。邪魔しちや悪いよね。

「行ってくるね」

扉が開いたことにも気づいてないみたい。いや、私が開けたからかな。

「おりん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

おくうとお喋りするのに夢中で、私が目に入ってないんだなあ。

「おくう」

おくうにも呼びかけたけど、やっぱり答えは無いなあ。二人ともお喋りが好きだもんね。

二人とも笑ってる。二人が楽しそうでよかった。

「ばいばい」

別れ際に手を振ったけど、全然気がついてないみたい。当たり前だよね。

「橋姫さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

ずっと河の流れを見てる。誰かに嫉妬してるんだろうなあ。いいなあ。

私も誰かに嫉妬されたい。誰か私のいい所見つけてくれないかなあ。

「ねえ、何かないかな？」

私のいい所。橋姫さんに聞いてみたけど、何も言わなかった。まあいいか。きつと他の人のいい所を見つけるのに忙しいんだよね。

「鬼さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

皆と楽しそうに飲みあってる。本当に楽しそうに。

「鬼さん」

もしかして皆の声が煩くて、私の声が聞こえてないのかな？  
でもいいか。ワイワイやってるから、水差しちや悪いよね。

「蜘蛛さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

これから地上に行くみたい。何しに行くんだらう。

私もついて行っていいのかな？

「一緒に行ってもいい？」

「まほう使いさん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

前に会ったことがある人だけど、今は勉強中だからかな。

私が此処にいること、判ってくれないや。真剣にやってるんだなあ。

私もあんなに集中して出来るようなものが欲しいなあ。

「みこさん」

「あら、こいし？」

気づいてくれた。嬉しいなあ。

「あんだ、地底帰ったんじゃないの？」

「えへへー、出てきた」

「出てきたって…地底の奴は来ちや駄目だったのに」

やれやれ、って溜め息を吐くみこさん。でも呆れてるだけで追い出

そうとはしてない。解るよ。

私だつてさとり妖怪だもん。心は読めなくても、解る。

「何食べたい？」

「なんでもいいよー」

「じゃあ適当にするわ」

「はい」

ほらね。

みこさんは無意識的に私を気にかけてくれる。もしかしたら、私が此処にきた理由はそれだったのかも。

あれ？

私、いつの間にか能力使っちゃってたのね。だから皆気づかなかつたんだなあ。

うっかりしちやってたなあ。

「はい」

「ありがとう！頂きまーす！」